http://decfamily.p1.bindsite.jp/2018/

We 35R

No.362　18/04/19

ピュリッツァー賞

現代文で勉強している「虚ろなまなざし」の題材、ピュリッツァー賞受賞作品「少女とハゲワシ」の写真は、中学校の英語の教材にも採り上げられていたようだし、「目にしたことがある人？」ということで手を挙げてもらったら、かなりの人が挙手していたから、やはり有名な写真といえるのだろう。

日本人が受賞した写真としては、右翼の少年が演説中の浅沼社会党委員長を短刀で襲った瞬間をとらえた「浅沼社会党委員長の暗殺」（長尾靖）や、アメリカ軍の爆撃から逃れるために、必死で川を渡るベトナムの二人の母親とその子どもたちの姿をとらえた「安全への逃避」（沢田教一）といった写真が有名で、これらの写真も、何となく目にしたという人は多いに違いない。

そのピュリッツァー賞の今年の受賞が発表された。引用しよう。（朝日DIGITALより）

＊

米国の優れた報道に贈られるピュリツァー賞の受賞者が16日、ニューヨークのコロンビア大学で発表された。公益部門では、ハリウッドの大物プロデューサーらのセクハラや性暴力を報じたニューヨーク・タイムズ紙とニューヨーカー誌が選ばれた。

一連の報道は、「#Me Too」を合言葉にセクハラの被害者が声を上げる運動につながり、社会のセクハラに対する見方を一変させた。受賞を発表したカネディー事務局長は「裕福で権力を持つ性的搾取者を暴き出し、抑圧や残虐性、口止めに対する責任を追及し、女性への性的虐待を償わせる衝撃的な報道だった」と評価した。

調査報道部門では、アラバマ州の上院議員補欠選挙で有力だった共和党候補のセクハラ疑惑などを掘り起こしたワシントン・ポスト紙が選ばれた。この候補は落選した。国内報道部門は、トランプ大統領の関係者とロシアのつながりを追ったニューヨーク・タイムズとワシントン・ポストが共同選出された。

特集写真部門では、ミャンマーのロヒンギャ難民を撮影したロイター通信が選ばれた。

＊

写真部門の「ロヒンギャ」難民。今、政治の世界でポピュリズムの問題が多く採り上げられているが、その背景の一つが難民問題である。極東の日本では話題になりにくいが（…とはいっても、少子高齢化の中で、どうアジアの「移民」と向き合うかが、今後の大きな課題であることは、前のこの通信に引用しておいたが）、中近東・アフリカと隣接するヨーロッパでは大きな問題となっている。さらに、このロヒンギャに関しては、宗教の問題もからんで複雑である。社会科学系の学部への進学を目指している人は、注目しておくべき論点といえるだろう。

一方、#Me Too の話題も、現代社会が抱える大きな課題の一つである。昨今の永田町を賑わわせている話題ももちろんだが、スポーツの世界でも、例えば女子レスリング界でパワハラが問題となったことは記憶に新しい。つまり、「ハラスメント」が大きな話題となっているということだ。ことは基本的人権に関わる問題であり、私たちすべてが関心をもって考察すべき課題だろう。

といわけで、さすがピュリッツァー賞。現代の課題と向き合っているのである。